

私の意見

市民が高める医療の質

“教育が変わっていくことが近道”と信じて

九州山口SP (Standardized/Simulated Patient) 研究会
医療コミュニケーション 薫陶塾
主宰 黒岩 かをる

“21世紀はコミュニケーションの時代”といわれているが、テクノロジーの進歩がめざましい医療の世界では、とくに医療者の人間性、感性が問われ、コミュニケーション能力がますます重要になっている。患者の意識も変わりつつあり、真の意味でのインフォームドコンセントの大切さが、よりいっそう認識され、実践されることが望まれる。

時代の要請を受け、私どもは、医療者教育で使われる“生きた教材”としての模擬患者 (SP) を養成し、教育や研修の現場に送り込んでいる。「医療の質を高めるには教育が変わっていくことが近道」と信じて志高く活動している。

研修のお手伝いをした。いずれからも、従来の研修内容に比べて評価が高かったという報告を受け、模擬患者を使った学習法が医療現場で切望されていることに、改めて意を強くするとともに、使命感も痛感した。秋には宮崎県医師会のホスピスマインド研修会を、冬には国立長崎中央病院のリスクマネジャー養成ワークショップをお手伝いした。

告知はいうまでもなく、臨床試験もリスクマネジメントも、目的は明日の医療を支え、その質を高めることにある。それらの成否はインフォームドコンセント

模擬患者とは 医療者教育に使われる 生きた教材

何年か先には、医師国家試験に、OSCE (オスキー= Objective Structured Clinical Examination=客観的臨床能力試験) という実技試験が導入されるだろう。確かに医療面接 (問診) は、いまでも昔も、診断に必要な情報を得るための最も基本的で優れた方法である。情報収集の過程で、よりよい医師と患者の関係が構築され、治療的効果ももたらされる。医療面接の練習は学生同士でも可能だが、仲間内では成果は半端になる。いろいろな患者の役を演じる模擬患者が外部から来て習熟度を評価したり、改善点について率直な意見を語ってくれれば理想的だ。

模擬患者の必要能力

模擬患者には繰り返しが可能で、失敗が許されるという練習台としての利点があり、ふたつの能力が要求される。さまざまな病態や個性をもつ

にかかっている。“十分な説明に基づく同意”という不十分な (!?) 訳語のせいもあるかもしれないが、インフォームドコンセント演習では患者の感情や思いとは響き合わない面接が行われることが多い。一例だが、試験薬を勧められながら「いつでも中止できます」と繰り返されるときの患者の突き放された気持ちを理解してもらえようか。

真剣さが人の心を打つ。OSCE合格のためにマニュアルをマスターしさえすれば済むという安易な考えからは、患者との信頼関係は生まれない。

医学生が、「患者という“人”に対峙 (たいじ) する専門職としての“真摯 (しんし) に取り組む姿勢、引き受ける自信と覚悟、誠意、暖かいところ”から、真の信頼関係が培われる」ということを、医療面接学習を通してわかってくれれば幸いである。